

新編日記
外篇
三

13
3149
3



13
3149
3

朝顔日記卷之二 故芝叟遺話

○ 四回 歌

大内家ハ、琳聖太子以来、綿々と續きて繁榮比かく武
 威ハ山左小ふるひけるが、當主大内新介多々良満興殿
 の代小いたして、己は數ヶ國ハ押領し、室町家の余よ
 よして、西海道の探題と稱もつ。當家の儒臣は、駒澤
 了菴と喚ふものあり。渠ハ肥後の藩中、宮城、庶助が
 兄弟あり、庶助が八男阿蘇松がたぬは、現在の叔父に
 るふよりして、ふまぬたのこて、此城下小来り、やがて駒澤
 郎きよたづぬちき、始て對面なふし。自己かく零落たる

柳浪



縁由は明白と告て、寄托たまはまこと、餘義おくれたのこ
けまに、叔父了菴もとよる、骨肉の因あるうへ頼母一死
人ままに、一議もあまざる承引、快く款待て舎りど
けま、その庵先生といへる、山陽山陰の際に拔群たる
宿儒にて、博問強記はさらまゝいはず、經濟の度量また
たぐひぬ、一は小よきて大内殿よりも重用いらきて、政
勢の商量官と令けられたり、受業の門弟ども、日ごとに
門は市にふか、這里に集合て、學問を勵まける、さか
ほど宮城阿蘇松は、這家小寓食めて、晝夜刻苦書は
攻て、剎那も惰たらず、従来天の縦せる英智あるうへ、
螢雪の功積りて、僅う小五ヶ年が間に學文成就して、その

見識まこと卓絶たる小い、叔父の了庵たよ手は拱やう
小上達せしとや、歌ありて證とぬす、

後陽成院

ままづ入朝し、道芝の處ハ夕の風よきととも
その五とせのうち、阿蘇松戸は出ずして、學問のこふ
日なかりしゆへ、させる話しおね、おと一十八歳はぬ
アけるその如月のは、初冠して、宮城阿蘇次郎紀春
雄と名乗ぬ、かく男とぬるふけりて、青雲の志やるうこふ
く、いざひとまづ京鎌倉よおむひき、仕官ぬかせき見んと、
機はきて叔父了菴よ向ひ、小徑よと遊學のため都會へ
のがまたきのぞここべる、當分の暇たまはるべしと、慥慥
小演けまば、了菴首ぬうりて、おまなとぬめ、都會はよまづ

華麗よて少年輕薄の結交好まざるをわろく。又こゝろ
とりしめらめと百般賺し、ふりて。渠が望が拒みける。
了菴あうせしハふりき宿意ありあへり。了菴と一子祥
一とつゝのあまどし。其の祥一所行放蕩するうへ父の教
戒なもちめど、了菴こまぬ見ゆれして。遂に勘當ふい
まの餘一男半女しめらねばいと便ふくねもひりとりら
不科阿蘇次郎が尋ねきたりて見えて。その伶俐きおの
る成愛し。おまぬ螟蛉とぬし。こゝ家督が續せん。其時
より其の準備ありて。熟渠が舉動が見ふよろづ小節は
拘いらぬところある。まつたく志望の大なるあへたりと猜
せしゆへ。今ふまじひよ手放せば、二度回を来るまじと。

おもひをかきて強よひき止りたるぬ。事よさと死宮
城阿蘇次郎とやくその氣色が見てとり。吾はどめ國を出
日より。御直泰からでハ仕まじと。大なる志がたてしこの
なり。駒澤家五百石の秩禄望むところふあらずと。一通書
留書がのみし。その夜も野干玉の闇よまどきて叔父
了菴が家が志のひいで。星夜よこし。ゆれも死なや
るぬ。足曳の山口のかとも廻りのあとお見をいつかくて
日が累ねて歩る不とふ。いつつ浪花の大都よいた。た
およべる墨江天王寺ふんど。あらくて拜と巡り。それより
北がとして長柄川がうちこた。山崎の古街道が経て
西嵯峨よ入。名勝故路がさぶ。不期も名よたてる嵐

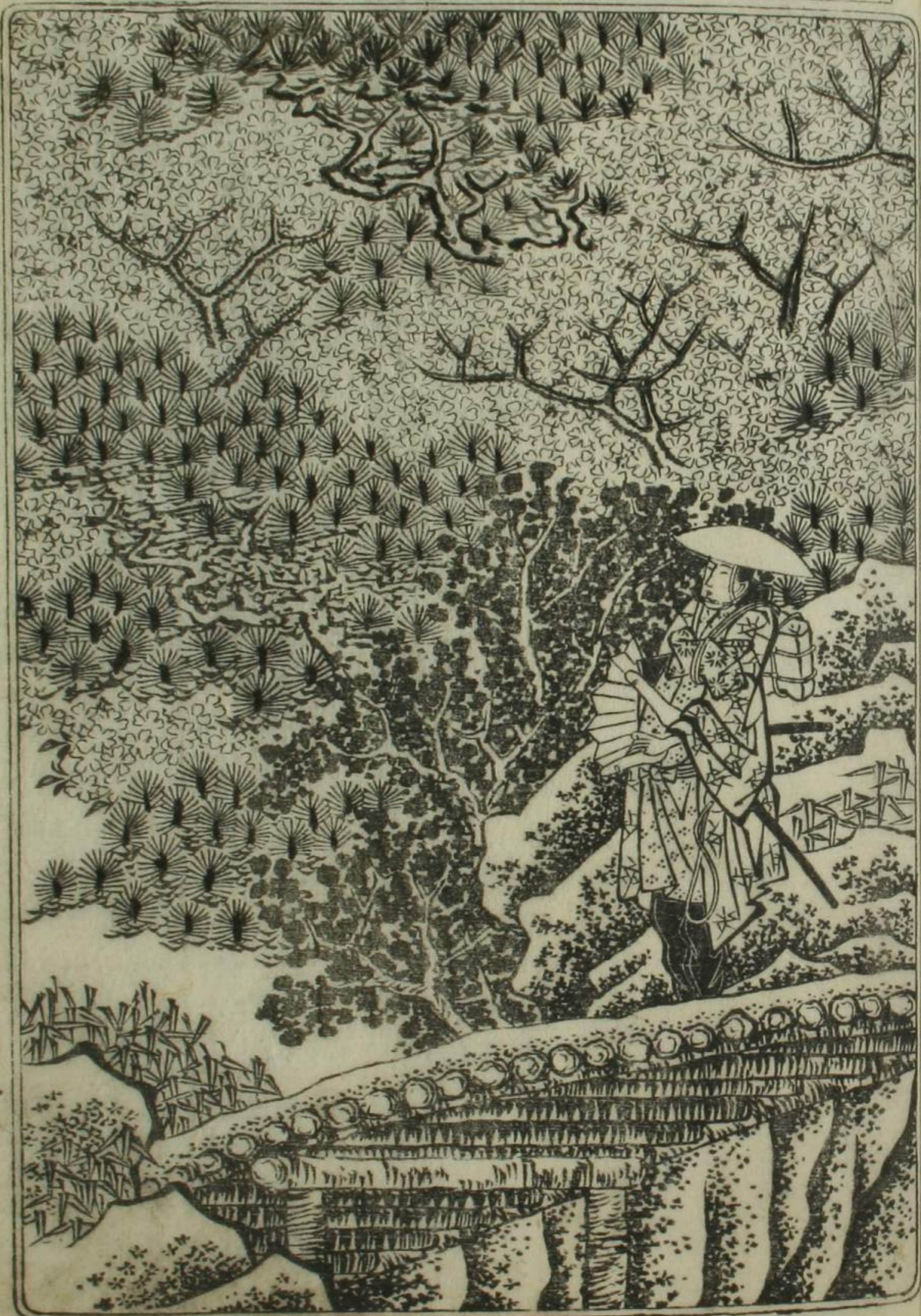
巻之三

三

山の麓に来て見れば、對面なる群峰の形容濃采の金
屑のひきけらぬ、かとうたがひき、下ゆく水、瑤璃より
も碧かま、おれたうふとよ、霞あひたる梢ども、錦のひ
きたせるやうよ、百千株櫻花の、こや十二分は爛珊て、
山も埋もせて見えぬむか、比しも弥生十日あまて
おまへ、天色の麗うぬる小人の心ものびらうふて、物面白
死とぞおろぐ、日いとよくとまて、川漆の氣色鳥の声も、
あ、ちよげふて、ふの、死土女雲のごとく出さうて、車
轂撃人肩摩、所せきまてうち集合所くは、幙うちへ
て、ねも、とら、圓居し、ほ、歌よびあり、詩作るあり、また那
方の河原より、下、藹りきたるが、いとく、醉まて、謡つ舞つ

隨意あざきんるひ花ハ餘外ぬる光景かるし、ねうし、
さそぐよ、洛下として、人の打扮の華奢ぬるハ、さらふもいハ、す
世ハ種々よ、己が自適るや、く、かく、風流たるわ、そびとさ
そへるこそ、優しけとと、獨語て、那里、這里と、傍徨や、
て、渡月橋、たまたま、那方よ、大やうかる堰のある、奴見て、
六の川の名よ、ねへるとも、ことと、つ、水無瀬の懸泉の、お
た、おぬる、一樹の櫻の中、勝とて、真白なる、六と、雪、奴、あ
ざびくハ、あま、この中の老樹か、ま、おるべし、爰、おや、ん、と、な、れ、御方の
御遊、おや、棚、お、小舟、棹、と、せて、管絃を奏、た、お、ける、が、其、声、如、
ふ、いと、いたう、清、と、なり、て、藹、た、け、かる、お、と、つ、み、を、お、し、
ふ、り、けて、侘、もの、音、よ、あ、そ、らん、嵐、の、心、の、花、お、ち、く、ま

風山の花を
買し宮城
阿彌次郎歌
僧月心風流
と談す



風山記 卷之二

五



風山記 卷之二

と両三遍らち吟下ける。其の時誰といふらど。後方より
袖と捉へて。今吟せらまし。足下の詠もる和歌もつや
こつゝ、阿蘇次郎つとらう向てあま見もべ頭。唐山
巾を戴き。身は褐色の衲衣を穿たり。殊勝の禪僧と
らゆるふぞ。いやしく腰折めて正是小的が詠たそ
蜂腰ぬ。那の禪僧うち點頭。足下の大姓高名。如何
阿蘇次郎應て。小的の宮城阿蘇次郎春雄といへる浪人
ふ。那の僧こそは聞て。あはよきかたらひ人を得たそい。
貧道は月心として東福寺會下のもの。貧僧も頗この道
は奢とてべるい。ご下居たまへ。霎時ものかたらひてんと。
うちひらとたる盤石の塵うちとらひて。二個相對は望と

占。互に風月の佳話をかをふ。その好めるおと色々相符。
とぬだ趣ぬましけま。阿蘇次郎も一知己を得たそと
悦ひける。月心いへらく貧道も其の峨阜の花見人と。昨日
東山より来り遊びて。甲夜の臨川寺に宿まり。佳期おける
こともあま。今より般舟院にまかして投宿ぬらうも
とも小夜櫻を賞せん。いかに。足下も同心ありぬ。い
が伴ふ。ひさきふんと。阿蘇次郎つや。今日は何
如なる因縁。や。尊者は邂逅。刺へ同宿を誘ひたそこと。
望の外。のよろあびふ。自來いそぐ旅。よもあらず。見
たまふとく。晝間の那のやうの人山人海。よて熱鬧しく
とぬらど俗氣な生ぜり。いっさま。今宵は月もあま。夜

句詩源氏物語
 須磨の巻
 のれん
 人しむりて
 あり言に
 のた掃磨の国明
 石の歌
 一落是春秋
 附しては
 或句詩と書
 是全章を
 見ゆると

深人静まる小乗て、尊者と手致携とへて。月前の花
 再賞しべらん。旅の伴侶世の好意。さらば陪伴やべし。
 うちつをだちてゆく。その夜阿蘇次郎が月心和尚示たる
 句詩として世よのこまなり。

渡月橋頭人渡月 月明還在緑波間

明も宮城阿蘇次郎、月心しほまだち、嵯峨山狐たち
 出し、げん天もごんどうりとかととちて。あまもよ
 ととよぬり。やがて太秦よいたまは、月心ハキウこのこ
 たる小訪人のあまとして、懇心は再會が期きて別
 法ぐ、阿蘇次郎も不とし、一夕の奇遇が感入。ふく
 その厚意が謝したち、こまぬ。こまの阿蘇次郎ハ

遠の起程よて、とうぐ志き盤纏しても支度せど、
 這里よて来る道よて、囊金ハ大うたは費使いたし
 つ。ととどとる大丈夫ふま、よとらの瑣々たるおとハ
 屑どももせど、阿蘇次郎ハ北野の菅廟に詣
 て、茶店の床ルよやもらひ、やとら茶錢が價ハ人と腰
 ち財布が、い探を見をべ、いつう売ぬりて、分半の錢
 子さへあらぬ。今宵の房賃ハさらぬ。さしあたる茶錢
 代さへ、こまきもたつきなく、あぐとて居たをける。但見まハ
 對面の繪馬堂よ、うち仰ぎて立居たる漢子の髪ハ髻リ
 き、手束びうりた。そのこして、後さま小反せし、あた
 かし慈茄のかたちめき。羊羹色ぬる、一ツ小袖うち着て、

安土加保 卷之三

偽八丈長外套をひつ穿、ちうら短っき相口を門よこし
 たるさま、いとちう繪馬医者者の類なり人と此叟笑いが
 渠が這方へふを向たる面をき、何とやら人熟識のやう
 なり。世よの似たる人もあるかと。瞳が定めて看る
 うちよ、渠もまよ阿蕪次郎が見て目なくおたす。一
 霎時痴立てうちまじりぬ。那の藪醫者の橘雞庵と
 て一条戻橋の邊側よ。裏店かきて住居せるものなりが
 みまよ、先この雞菴此の瓜葛がたよりて、周防の山口
 小下で、國守大内殿の醫官萩野祐安が徒弟とふま
 こまが玄関番が勤り居しうち、雞庵しとより破落戸
 のまよ、おまよ、いつら祐安が息祐仙がそのか、とら

花街へはをちき、好々標蝶よぞ志たてける。まよ小かいて
 雞菴ハ祐仙が愚蠢が欺負、多方騙局をまよ。祐仙と
 志て、その父祐安が調度よ。圓金二十兩を竊出させ
 大をね借しるやいま、その夜よ山口を逐電して、大の頃
 京都へ回し居たるなり、まの雞菴比先山口におまよと死
 駒澤許へ入門して、その講譯が聞よ来往せしやへのの
 阿蕪次郎としも熟識なり。さて雞菴ハ駈し、阿蕪次郎が
 了と認りしやへ、頗よちうげきうりて、礼がさし、一別以
 来契涸の情が叙、またその上洛のちへか問、阿蕪次郎も
 礼が回し、小的まよと邊の旅行よて囊中も乏しく、かく
 窶々しく志て、まのこたすよ呻吟ぬるよしく、おからさま

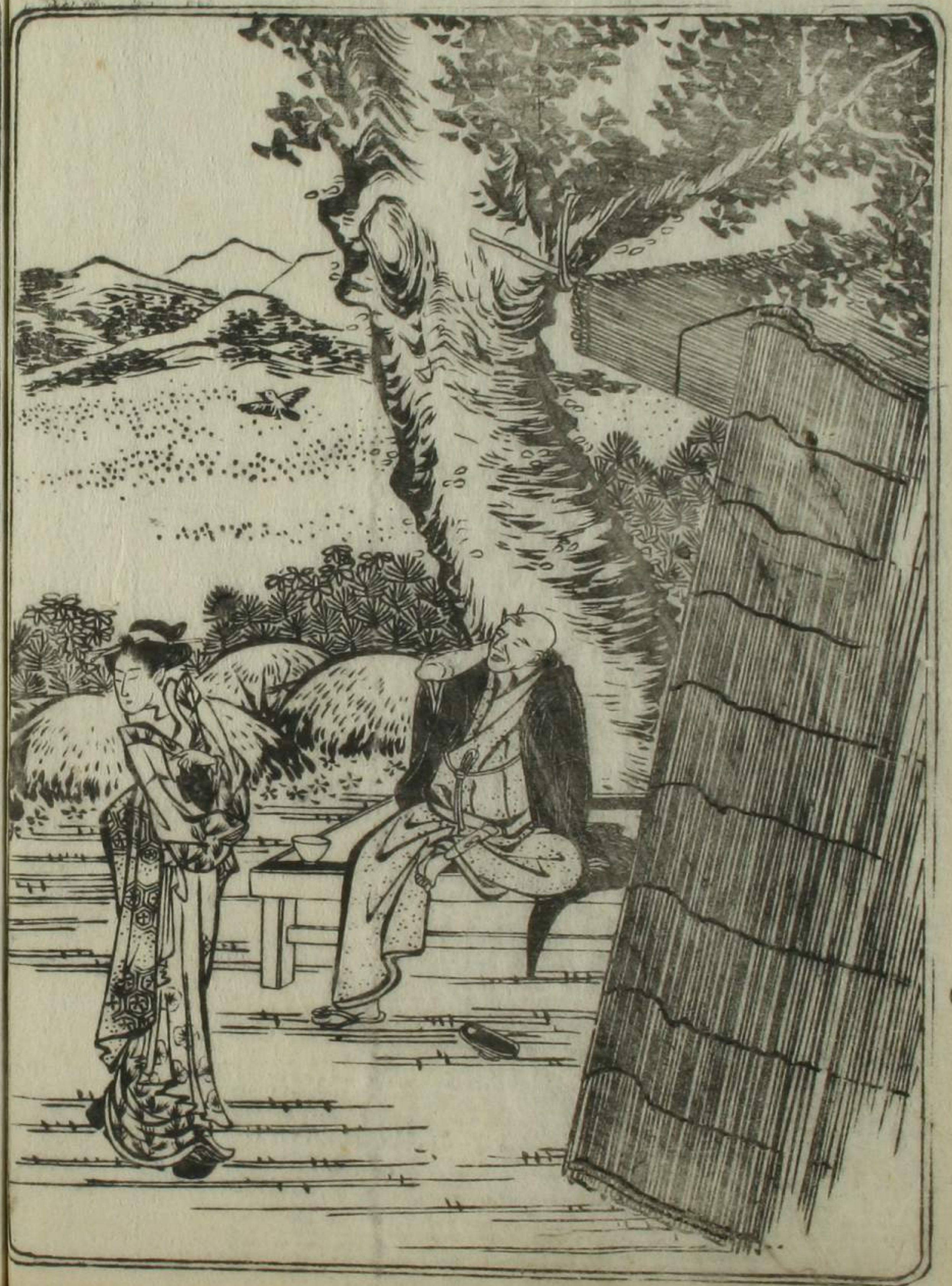
ふりちめけて、今いまいひつ小としせ人をべねし。いひつきてよけんと商量さうりやうなふせば、鶏菴けいあん咲面さきおもてはくす。その嚙かみ窘迫きよまひおらんと。懺慟ざんどうよいごさひける小ぞ。阿蘇次郎あそじらうふりく悦よろこび、さあらば多擾たごさうよめつうすよとべしとあつく感謝うけいをかしぬ。ふのと死し俄たちよ天色あそらかきくらし。雨あめ志こころとふそぼち来く。兩個ふたごうの忙あひそむ袖笠そでがさして、簷のゝづたひよて、雞庵けいあんが家いへよたどまほきぬ。鶏菴けいあんふどてかく、容易たやすひとけ留舎かきましぞねまば、渠みちしと阿蘇次郎あそじらうが、萬藝まんげいよ精熟せいじゆくせし事こととよく知し。居ゐゆへふを以もつ香餌かうじよして、榮利えいりは射や人ひとの伎倆たくりなす。そをより宮城みやぎ阿蘇次郎あそじらうハ、橘たちばな雞菴けいあんが儼舎げんしゃよ

在あて渠みちが勸すすまようせ、儒書じゆしよの講釋かうせきははしりけるよ止とよこま徳孤とくこならず必隣かならねありとふぶく。満京まんけいの諸生しよせいども、阿蘇次郎あそじらうハ博識はくしきは聞傳きんでんく。ときししと集合しゆごうひ来て、その門かどよ入いるもの夥おほく。ふをふよきて、東脩とうしゆ頗なほ叔しやく納なける小ぞ。雞菴けいあんハ古打こうちして獨咲ひとりさきし。その束脩そくしゆも大半たはん小掠せりつとて。十分計じふぶんけいことを得えたるといし誇たかりなる顔かほ貌かほなり。おほひね一回いっぺん阿蘇次郎あそじらうハ出會であひ。その議論ぎろんと聞き不ふどの者もの感服かんぷくせごさひぬく。個々ひとりひとりその大才だいさいと賞あやして喧けんまくいひさひよ。後のちふの由よしある人ひとさへ門下かどしたよ来きるあそびて。まことし繁昌はんしやうなりけまとも。鶏庵けいあんおのまのそその利りは貪あます。先生せんせいよいろくし小。新衣あらぬとも穿きせ

ざろやうをねまは。高弟どもも察して不平
 の色なぬし。そのしもがら察し小商議して先生をすわ。
 下河原よて一笠の乾々浄々せし空房を借け。一切
 の家伙よてとまらぬひ。日成トて阿蕪次郎を這
 里よ移し。まゝ一個の老實なる蠻僮を買て炊夫とす。
 さまへ阿蕪次郎。這里よ下帷せしより。門人まをくあつ
 ました。衣食豊充てと過活ける。この後まを志むらく話
 日月梭のごとく。宮城阿蕪次郎とや二十一歳おぞ成ける。
 今年はいらぬる機運ふや卯月の初つかたよ。鬼直瀬田
 の間。螢の出ること夥しく。夕暮ふどふ。眼口ふといるばう
 了ゆし十や二十に。一攫よし握らるるふどいひのふるよ。浮

やとさ都會の人情京浪花の人いふをと見んと隨意
 酒肴公貝へて。樓船いさらふ。漁船いさへあつらひし。宇
 治橋のとなりハ所せきまで棹よして螢狩とぞ競ひける。
 一日下河原の橋居よて。宮城が内弟子。芦守忠吾。伴
 筑八。兩個かねて示しあはせし。おや。阿蕪次郎よ向
 先生も聞召るくおとく。おの夏ハ宇治の螢影しく出て。
 その輝煌し格別ぬるよし。先生も朝夕御指南のよふ
 て送日たまへば御精も竭やべし。明かば一日の間を偷
 試歩あらばよき破問ぬらん。吾傳も跟随やうしてんと
 懇ま勧めもば。緊温潤ぬる阿蕪次郎。深等が好意と特
 うむ。その一段有趣べし。容易允諾けもば。兩個ハなとく

平野の茶店
 へらのちやま
 へて橋弁
 へて橋弁
 阿蘇次郎
 あそしろう
 いこめて巴
 が高小談
 がたかこたん



阿蘇次郎
 あそしろう

阿蘇次郎
 あそしろう

雀躍していさそたち。炊夫が驅使、手小くちとの副副と
けし。小々やうふる食籠の三段はうてあるふ。そまをものし
て。あろの酒筒がはらるおんご。いと騒がけまバ。阿蕪次
即まそ見見ていへらく。その行厨ハ頗沉重なる小。猿助ハ
畝守さす小。拿人ハいごめさあくとそへ。筑八點頭。明日ハ
面々輪番。看緇輪拿小してまいらんとつふよぞ。大家開
と笑坪ま入る。誰うはからん。阿蕪次郎がふの螢狩よて。
一個の絶美の風流女と奇遇。許多の説柄がふさんとい。

○五回 螢

けふの日もいとよく晴て清和なるよ。風さへうちそよめれて。
かのぼら交加人の袂もふくらうおる。官城阿蕪次郎ハ

白面青衿。伴筑八。芦守忠吾が伴るひ。黎明よて都門と
出て。伏水よいたま。豊後橋がたて。小倉隄をつたひゆくま。
のこりの風景恰も一幅の西湖の圖が看るがぶとくたまま。
阿蕪次郎ハいと興あてて心のどめき。古詩おど吟どけあめ
行ま程もへと。宇治の地方よいとて。まづ黄蘗山なる萬福寺
の山門ま入ま。伽藍の莊嚴ども總て支那めきてめづらし
そまよて興聖寺平等院ふんど見巡る。扇の芝の故跡を
だづぬ。やがてまた名たる通圓の茶店よたより茶が暖
て湯が志のぎ。又しも宇治橋がたて。橋姫の祠のはより
小傍復經島亀ヶ石あるの彼佐々木忠綱が乗いだしたる橋
の小嶼が崎ハいつまど。捲の島ハあまふらうと。往つ還まつ

躊躇はし川の面を見とせば、あの時を未牌の下刻
ふもども、こや宵燭狩の催とおぼしく、種々の遊舟ども
陸續と掉のふり来て、橋の上下の所せきまで、うり集合て
熱開きまといふさうりほ、おの後の世の天満奈お彷彿とら
阿蕪次郎ハ兩個の門弟と共に、橋の欄干に靠てひたさく
目か娛ましめ心か慰ら居たまへど、とこ一間隔て、川上
ろ柳原まげくたちあたるが、時しも緑の蔭かふくめていと
冷靜き佳境なるよ一艘の樓船かほかせて、ぬい誰ともさ
らぬ火のつくし琴かぞあべくふなまゆいたる鶯舌ハ、
伽陵頻をもねもひやらせ、その弾音いといたる妙よし
て、興趣まといふはかたふし。阿蕪次郎眉うち擧、六

古怪や、那舟までいく琴曲ハ、志らぬひとの頌歌なり、筑
前の國司太宰少貳殿秘曲なるもの、西國小をら弾人ま
まおれ、あのをとへよ十八段の廻波とり、秘操ありといひ
けをば、忠吾筑ハ今おはどりの師の博識にて音律ふ
さへ精しきふと感ドける、おの時さく河の面よも那の
琴曲か聞んとおや、夥の舟ども漕よせて、琴弾ふお
とまき死ける、筑ハおの弾人の藝おらん、かほどの美
声ハ都下よても、たやとく聞得べからず、さらすば難波女
るうもあらす、阿蕪次郎いへらく、いおし、おの弾音を聞
試るよ陰声なり、總て女の声ハ陰なるものぞ、とまどやこ
盲目ハきいめて陰なるものなり、おの声ハきつらす、たし

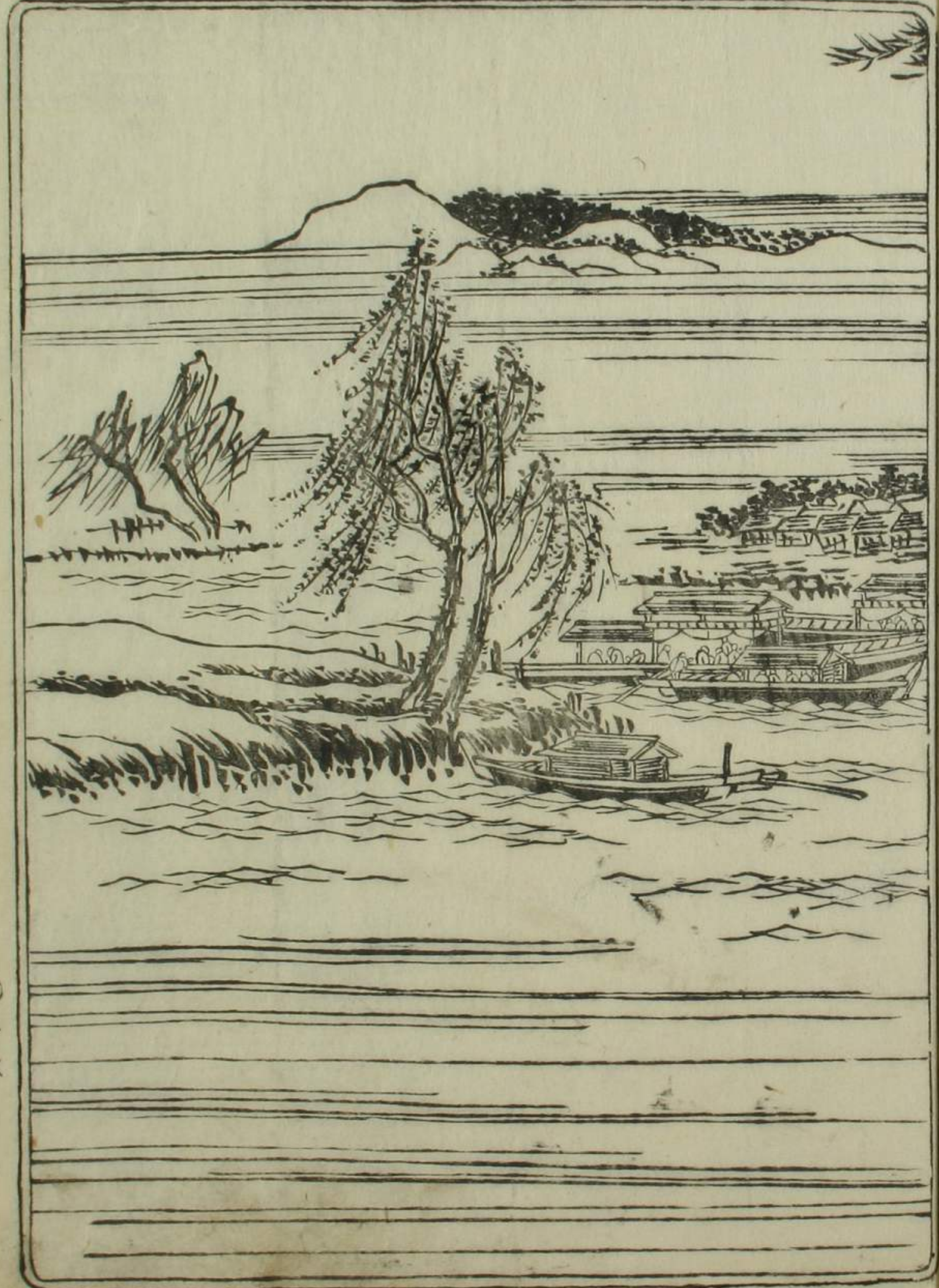
小女こをい女にふまども陰中かげちゆうは陽ひの合あは、やうりやうり両眼りやうがんあさらり
 ぬる赤通あかとお女にかるべし噫唱いさなかとのちうしとよいでさらば
 ちうげきよきて聞きまよしと、兩個りやうごうのものどしと商量しやうりやう橋
 誥ごぬる漁戸いしこわたのこて、一葉いつはの艇ていを借かうけ、直ただは打乗うちりやう船
 公こうに役やくがせて、那あのの柳蔭やなぎかげの樓船りゆうせんのあたりに、掉たうやらしむ船
 公こういちこやく掉たうよして、那あのの船ふねの真側まがはよまどよせて、擢ひち
 川中かんなかよさしとくわ、かのまのそのま、船端ふねはを挽ひちして、断たぬ
 阿蘇次郎あそじらう等らは、割籠わりかご竹筒たけとうまどとて出でし、冷ひやけを酒さけうち
 喫く興きやうかたをけて、濤うしほげへの曲まががきく、やがて琴こと弾ひもやま
 けをば、集つど合ある船ふねども、隨意ずいぎよ散ちらさ、や遠とほざかる小こつけ
 て、あといひつそと静しずまをわへて、恰好きやうこう那あのの船ふねの障さやひら

けて、裏面うらおもてのさまあらは見え、四十しじゅうむうり女房にようぼうの紫系むらさき塩瀬しんせの
 袷あはの上うへは柿地かきぢの小蔓こづる雲鳳うんぶんの帯おびを志こころりて、坐ましたるが、その
 膝下ひざもとは青春せいしゆん十六七じゅうろくにんとおぼしき小姐こじゆありて、金系きんぎのひ
 た繡刺きうしせる緋紋ひもん縮緬しゆくめんの襲うわすゐして、烏金くろきん天鵝絨てんがじゆうの帯おびを纏まとひ
 同年どうねんかどの了こゝろ三さん個ごむうりまかへづき居かまて、その側わきは、
 一族いちぞくの奶ちちくめきたる女客にようきやくも、その見みせ、琴ことは小姐こじゆの前まへは横よこ
 たいに在あるぞ、今いま彈ひぜしぬしといひらぶるくまは、その
 人々ひとびとは香爐かうろを輪流りんりゆうつ、名香なかうを聞居きこたる体ていいと高尚かうかうさう
 こも、遷うつる物音ものねの志こころづま、しむびるりとまらる、浩然かうぜんよ
 不意ふぎ一陣いつじんの旋風せんぷう吹ふか、忽たち地ち舟棚ふねだまよありたる物件ぶつけん
 の軽かろさかざり、四方いっぽう八面はつめんぬく吹ふちらしたるふ、那あのの小姐こじゆ

の帕子がしをも吹ふまくて、ふを捲まけ雲井くもい廻まりひに
 ける。一盞いちさん茶時あての狂風あざしの和なげをば、適間とくま捲ま賜たまたるものど
 も、陸續れんじく墜おちくだりぬ、あるが中ちゆうに那なの小姐ひそめの帕子がし、至いた輕かろどけ
 頃ころも落おちがとく、ひらりくとひ翻ひら来きるそのさま、帛色ひやくいろの濃こ
 紫むらさかるが、暎やみ暎やみ映うつやきめひて、宛あやも綵あやある鳳凰ほうおうなんどの
 舞まいあそぶとあやままつ、了し衆しゆども船ふね檻いへ出いて、あまま
 あまよと悶も搔かとりひかし、那方なう這方このうの舟ふねよりもふをば
 見て、コハこ希代きたいの壯觀さうくわんかと罵ののしり、さはぐ、事こと有あ奏巧そうこう
 かの帕子がし、漸おそ々おそ小飄せうひょう墜おちて阿蘇次郎あそじらうが、船ふねを望のぞみ落来おちる
 さまをば萬機轉まんきてんの阿蘇次郎あそじらう、倅せと舳しゆうの方かたは居ゐあはせ
 たる小ど、そのまま起たちてもづららら擗なりひとつとふちるし

見みえしが、艇ていハ隨まつとまいりぬ、不ふどよき所ところにて、阿蘇次郎あそじらう
 左ひだりの手てハ後ごさま小擗せうなりら、右みぎの手てにて腰こしぬる扇あふ子ご抜ひ
 くり、かの落来おち帕子がし水際みづぎは二尺ふたしちばうりふて、ふをばひつか
 け把得とたり、見みる人ひと一同どうどうは唱采なうさい喧鬧けんごうて、半响はんきやうハ鳴なも止やまり
 ける。這時このとき阿蘇次郎あそじらうおもいずしらたる擗なりらかせば、とら艇てい
 と隣となりの船ふねと岸多哩あしなと抵あてて、あたりも粘ねりはきたるやう
 ふうちあひておねをやらど、恰好こうこう了し衆しゆどもハ船ふね檻いふあり
 あらゆへ、阿蘇次郎あそじらうハそのさしし那なの帕子がしハ扇あふ子ごに載のせて
 さし出いで、さし姐々あねたちの帽ぼう子ごの侍さむらいらどやして返し
 あため、了し衆しゆの浅香あさか隨ま即すなはちかたしけぬと謝まがひのべ
 かの帕子がしハ了し衆しゆハ扇あふ子ごハ回ますして、仔細しじゆと阿蘇次郎あそじらうと

宮城阿蘇次
 郎兩個の門
 弟とともねひ
 鬼道の行
 狩と赴く



〇五三〇部
 〇四八二

〇十六



〇五三〇部
 〇四八二

〇十五

看るよ。その俊俏の斯文おる眉清目秀美麗王と欺じき。
一表凡ならず衣紋のとまり正しく。舉動の溫柔おれども
どふとぬく嚴とせし風趣あり。顔容のけたりきさまい光
源氏よ比べく。その神氣のいさましき。遮那王丸も
劣るましくぞおほゆ。やがて前のる衆出来。阿蘇次
郎は對て手ぬ突。礼正しくつやう。婢主母のやうさう
ハ。適間女兒が失ひたる。帕子ぬぐとたまひ。いひ。あよ
ぬき悦びよ侍るふ。唐突おまども謁見とべ。て礼と
し叙まくねもひいへ。まうけの酒醜いし。荒とてとべれど。
九献まゐらせぬん。おねたへ。とらせたまへ。と請どける。
阿蘇次郎うち回答て。まづハ帕子御手入悦ば。くこと

さうらく。ま。御船よりこと。美酒賜。はるべう。ねもお
ろねる仰も。いと感激おもひ侍も。御舟小へ上落のこ
おはすなる小冠者として。ちうげき侍らん。へ世の憚お
き小もあらず。よて無礼おがら。も同辞。か。ま。と。ど
叙ける。不衆どもいさう。あ。ま。ぬ。聞。い。ま。ず。多。方。語。ぬ
盡して誘ふ。ひ。せ。た。む。る。よ。忠。吾。筑。八。は。さ。き。つ。う。こ。う。り。の
美人の隊。見と。ま。て。い。と。好。ま。し。く。お。も。ひ。や。ど。く。誕。ま
ね。と。し。て。あ。ま。け。る。う。あ。ま。ぬ。幸。と。し。て。衆。ど。も。と。ま。ら。し。も
ふ。ぜ。ひ。と。と。先。生。ぬ。と。く。ひ。ま。が。不。衆。ど。も。ハ。ま。づ。人。質。の
佳備よて。忠吾筑八。ぬ。や。く。巴。が。船。へ。い。ざ。か。ひ。つ。ふ。け
ま。い。て。阿。蘇。次。郎。が。袖。袂。よ。と。が。ま。ひ。と。ま。ら。口。説。て。や。ま

まず謹慎ふつ死阿蘇次郎も今ハ不どくもてあまし
 めしき年がましき侍女のおもふ出来コハこのがさ
 死石部金吉さまよ。かゝる風流の遊は風流のままをひと
 何ういふろしかるべきいざといひつ。手はとつてわをぬく
 ひき入る小ど。了衆どもいさらふ。忠吾筑八まで是は
 扶け袖ひひき腰は推しふど。無難舟の中よいざぬ
 ひけ引入る。阿蘇次郎ハ當下かの船の中央よ堅と占
 まづ東道負ぬる女房は礼をかして。その好意は謝し
 おひ。また堅並は寒温を叙ける。かの女房ハこころ暮
 春景たるともとづく。志きそのさま咲後またる牡丹の
 ぶとくふて。なとしも餘香は失かはず。そまじり小姐と

ねがし死ハ世は冠絶たる標致よて正しく沉魚落雁
 の容閉月羞花の粧あり。かの小姐暗地斜秋波いよすに
 阿蘇次郎もおもはず。おつと四目齊視けを。小姐ハ情をこ
 笑眉はく。袖かき掩宛轉ハ天津乙女の人間は下を
 てあそぶよやある。龍宮の乙姫が海底より出て
 慰さむとぞおもがなる。筑八忠吾ハ志を成見て。不どく
 上有頂天。ものつへとさへまばし。をどろぬ。かの女房は
 帕子の礼儀のべおひ。見たまふとく。こらこら船ハ郎
 たちとてもぬい。いと興おく侍。よよよくもたらせ。た
 まひしと。やとら盃と。をあげて。村醪の酔は足ず。野花の
 趣きなふさずと。よりせども。一樹のうげ。一河のながまも

他生の縁といはうとぞや。うらぬくねがしてきこしめせ
 と。阿蕪次郎よりこゝろをば、阿蕪次郎もよろこびまたおぼ
 はらざらむ。款待は遇へるとふりく感懐なぬぬされ
 どふほうめく。まきたいめんかまべかともふうちとけたる
 けこひもぬく。けんの空の晴和ぬるさまふど演てや。風流
 たるふとはもふころぶやく。女房とのへてや。郭公と聞召れ
 たらんとつふ。阿蕪次郎いらへて。まの夜ころの。まろろがけ侍を
 まうど我をむこころへ。ふつよ来啼ぬよや。ひめのひまよ
 いかとつを侍をけん。おはけりぬく侍。きのへある人の
 岩倉よまかして。初音は聞得しといひやこころつふど。清
 談をまより敬盃酬盃いとふさハハ。さむかきお人

佳人と一對なぬして奇遇ハ正よふま錦の
 上よ花をそゆるとつべう。いそむる盛事ぬこし
 ぶの光景は見るものども。あるハ羨も。あるハ執妬して
 あたりの船より。亡頼ものとおぼしく。百般罵しつゝあひて戯
 弄よぞかの女房侍女よ。吟付て。左右の舟窓は扇せつかく
 て。觸しきむしめむ。来て。まむらくぬし。もとたむをば。
 阿蕪次郎ハ此の着酒力。そのうへかくたてふり。船の
 裏比ハ四月の天氣ぬ。何となく蒸々と炎氣けふ
 ちえぬ。ぬまげかく側なる扇子とて。三四分をいひらぬ。
 一望よゆるませたまへと。會おぬか。襟のあたまとうら
 めんぎ。やとら下よ。おろんとして。おもはずぬぶそかく

ひらき見まば。一首の歌は寫はけたるが。まづ筆のすこ
びよのほねねらすを。おぼやち。

阿蘇次郎ハ認める忠吾が扇ふるふぞ。渠が背向ひ

コハ足下のしらたまひ。扇子ぬるう。歌のさま優し

さのさらふて。墨痕のうら。いとつべうもはし。何等
の人の寫を。一や。そのぬ。いと問けま。筑八應

へて。その婦人の詠歌ぬる由。さるか。とより得るべ。死。志
うあまど。その人ハ誰と。ふふと。成。き。ど。と。阿蘇次

郎眉ぬひとめ。さもあら。加茂の祐包。さらす。たま
ぬるらん。今の世都下。よて。ふも。や。どの。歌よ。び。人ハ

聴し。あ。よ。ば。ず。と。ふ。う。く。感。ぜ。一。面。も。ら。る。乳。媪。ハ。や。ど。く

絶。倒。い。て。あ。ま。ま。ま。の。御。顔。を。と。る。ふ。そ。れ。を

と。が。か。と。さ。ま。の。主。母。の。詠。た。る。歌。な。れ。と。い。へ。か。の。女。房

ハ。乳。媪。ハ。叱。り。て。さ。ふ。洩。し。と。い。と。と。づ。う。死。ふ。と。い。ふ。阿

蘇。次。郎。襟。も。と。刷。ろ。ひ。原。来。上。萬。の。御。詠。歌。ふ。つ。と。る。う。

い。べ。菘。群。た。る。風。趣。あ。ま。け。る。よ。と。ふ。う。く。感。は。か。へ。て。ぞ。と

こ。ら。り。那。の。女。房。も。い。と。と。ら。ら。よ。と。ま。ふ。も。て。ふ。せ。ど。と。

さ。さ。つ。か。と。し。り。琴。と。い。ひ。香。と。い。ひ。ふ。と。よ。今。の。和。歌。ぬ

ご。の。風。流。と。る。態。の。趣。向。あ。る。ふ。ぞ。ふ。も。が。た。り。よ。三。個。の。漢

子。ハ。全。然。と。蹶。壓。を。興。ハ。婦。人。の。う。た。よ。奪。ハ。ま。お。の。く
差。遣。た。る。あ。ま。ま。ぬ。了。負。レ。精。神。の。伴。の。筑。八。味。へ

かねてや。巳よが扇あふ子のご蟬せみ眼めのうたなびうふさやふるし。
那うの女房ふらうの前まへよさういだしふの扇せん面めんは。ふまをぬる我わが
師しよつそ。その詠えい詞しな書かて給たまぬと。賣う弄りぬ。阿あ蕪わ次じ郎らう
はふまを見て。不ふどし手てふ両りやう把はの汗あせがふぎまつ。女房にやうぼう
とやくかの扇あふがいたがねひらきまつてあまが

よれ人の月つきいふうめし。かたそと思おもへし。ぬき世よふ
と走し筆ひぬる墨すみ痕あとのうけくし。さ。内うちかから飛ひ花はな落おち葉はの
おとくふ。その女房にやうぼう數かず回かい吟ぎんぜし。うへ。コハなさけふ。た
御ご詠えいして。ちうこそ。の秀しゆ逸いつとこそねもひ侍さむらひまつといふし
その人ひと品しんも慕まほへるさま。して賞あきしける。阿あ蕪わ次じ郎らうは又また
ふも前まへの歌うたが。ぬりて。あつと語ことは。償かひか。かねてつらやう。

適た問と彈だんたまへる筍たけのこの琴ことは。たしう。筑つく紫むらさぬる松まつ浦うら檢けん
技ぎ操そうたる。まらぬ火ひとつ。調てう子しふて。筑つく前まへの守まも殿どのの
秘ひ曲きよくぬ。し。うけたまひ。た。鶯うい舌したも。いと嫩なやり。よ。いと
ぶ。侍さむらひらひ。は。まへ。極ごくめて。令い姐あねの御おん凡ふん音おんとこそ。知ち
ま。と。べる。か。くる。秘ひ曲きよくが。ふ。る。人ひとの都みやこが。と。ふ。ある。べ。り。と
お。ぼ。え。侍さむらひら。ず。さ。ま。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。
や。ら。ん。さ。ま。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。
ち。聞きて。コ。ハ。お。た。だ。ぬ。ま。あ。い。侍さむらひまつて。いと。と。ち。が。ハ。い。う。ぬ。る。
そ。れ。へ。と。ま。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。
で。う。あ。ら。さ。ま。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。
さ。う。ら。い。ぬ。た。の。た。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。上かみ。薄うす。ま。ま。い。う。ぬ。る。

旋風旗と
おしと才子
在入と遇ふ



とひ。とくく御名なかのらせたまへ。阿蘇次郎いへらく
 小的ハ西國がとの浪士あま。もとまを下從のうへふれば。
 いうでおまがま。くも名のまらべき。さあめをこが性じ
 て。律の調子な好をとべるが。今の御凡音の有趣こそ
 をやらんと。聞からく太宰の家よ。菊の葉とつみ秘曲も侍はし。
 不知火を弾せとやうへいよも菊の葉と知りめさぬことハ有じ。
 今日ハ不思議の幸あまて。遇故卿の音ざらと承ま。一入興深くあは
 えおべまぬ。かゝまけまど。よたつみでよ。あまをば菊の
 まさうともあやどりて聞せたまへと。いとせちふのぞと
 ける。うの女房うふづきて。コハムハ。ムもまろし。めとま
 ね。その唄ハ女児もよく記得とべま。やよ深雪かどら

